



Title	スペイン語における直接目的格三人称の形態選択と他動性の高低—le語法を誘発する要因の通時的考察—
Author(s)	高橋, 瑛奈美
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/101745">https://doi.org/10.18910/101745</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名(高橋瑠奈美)	
論文題名	スペイン語における直接目的格三人称の形態選択と他動性の高低 —le語法を誘発する要因の通時的考察—
論文内容の要旨	
<p>本研究は、スペイン語において本来三人称直接目的格の機能を果たす人称代名詞lo(s), la(s)の代わりに、同機能を果たす代名詞として同人称の間接目的格人称代名詞le(s)を用いるle語法(leísmo)がみられやすい文脈を明らかにすることを目的としている。現在、同現象はスペイン語圏全域でみられるわけではなく、使用法や出現率は国や地域ごとに異なるとされている。また、le語法使用者はもっぱらle(s)のみを使用しているわけではなく、非le語法使用者であっても文脈によってはle(s)を使用することがあるとされている。</p> <p>先行研究では、形態的および統語的要因(Cuervo1895)、ラテン語の影響とスペイン語におけるその後の発展(Lapesa2000)、通時の考察(Echenique Elizondo1981)、他動性および語用論的評価(García1975)、(Flores2004, 2006, 2007)、地域差(Fernández-Ordóñez1993, 1994, 1999, 2001)など様々な立場から同現象の起源、変遷および実態を明らかにすることが試みられてきたが、管見の限りそれらが十分に解明されてはいない。ただし、le語法の出現率は歴史を通じて増加していったことは明らかにされている。たとえば、Lapesa(2000)によると、le語法は<i>Cantar de Mio Cid</i>などの古い文書においてすでにみられ、15世紀には人の男性単数のle語法が一般化した。</p> <p>本論文に先行する高橋(2022)では、le語法の初期における出現傾向を考察するために、中世に焦点を当て、13世紀から15世紀のあいだに書かれた8文学作品において特定の意味の動詞および特定の条件を満たす15の動詞を対象とし、le語法が中世を通じてどのように拡大していったのかを通時的に考察した。その結果、中世スペイン語では他動性の低い文脈においてle語法が出現しやすい可能性があることが確認された。したがって、本論文では、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)を支持し、他動性と関連してle語法がみられやすい文脈を考察する。また、より広範な時代からle語法の出現傾向を通時に考察するために、13世紀から20世紀初頭までに書かれた26文学作品を資料体とする。これら26文学作品は、le語法の出現傾向の通時の考察を適切におこなうために、作者の出生年を考慮しつつ選定されており、高橋(2022)の資料体である中世に書かれた8文学作品および16世紀以降に書かれた18文学作品からなる。さらに、16世紀以降の作品については、le語法がみられやすい文脈を知る手がかりとするために、通常le語法がみられないとされている非le語法圏出身者によって書かれた作品も取り扱われている。</p> <p>本論文の考察手法は以下のとおりである。まず、資料体からスペイン語の三人称の弱形代名詞(le(s)、lo(s)、la(s)、語尾消失形l'、le(s)の異形li(s))の例をすべて収集し、その指示対象を分析し、指示対象ごとのle語法の出現率を算出する。次に、Hopper&amp;Thompson (1980)が提唱する他動性の度合いを測る項目をもとに本研究で使用する他動性の度合いを測る10項目(意図性、主語の有生性、直接目的語の特定性、直接目的語の受ける影響、動性、肯定性、法、アспект、話者の語用論的評価、項数)を構築し、それぞれの例においてle(s)およびli(s)が直接目的語として用いられている要因と語源を維持した形態lo(s)またはla(s)が用いられている要因を他動性の観点から見出す。このようにして、le語法の拡大を促した要因を探り、le語法の出現傾向および変遷を考察する。</p> <p>第1章では、研究の背景、本論文の目的、考察手法、各章の構成を紹介する。</p> <p>第2章では、スペイン語の三人称の弱形代名詞が非語源的に使用されるようになった要因に関する仮説を述べている先行研究を概観する。非語源的用法の発生と拡大に関する仮説は、伝統的仮説と1975年以降出現した新たな仮説の2つに大別される。ひとつめの仮説は、Cuervo(1895)によって提唱されたいわゆる伝統的仮説であり、同仮説では有生/無生および性による形態の区別において三人称の弱形代名詞の各形態がもつようになった機能およびその発展を明らかにすることが試みられている。一方、新たな仮説のうちのひとつであるFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)は、地域によって三人称の弱形代名詞の体系は異なるとし、地域ごとに異なる体系が生じた過程に関する仮説を論じている。また、もうひとつの新たな仮説であるGarcía(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)は、三人称の弱形代名詞の形態の選択は対格および与格に典型的な意味に基づいているとし、直接目的語が与格に典型的な意味</p>	

またはそこから派生する意味をもつ場合、le語法がみられやすいとしている。

第3章以降では、本研究の資料体である13世紀から20世紀初頭のあいだに書かれた26文学作品の例の考察をおこなう。

第3章では、非語源的用法の出現率の通時的考察をおこなうために、各作品について指示対象別にle語法およびla語法の出現率を示す。出現率の通時的考察の結果、次のことが明らかになった。時代および地域に関係なく、ほとんどすべての作品で指示対象が人の男性単数である場合、le語法がもっともよくみられる。ただし、指示対象が有生物の男性単数である場合に次いでle語法がもっともよくみられる指示対象は作品が書かれた時期や地域によって異なる。また、性による形態の区別はle語法圏のほうがよくみられる。さらに、非語源的用法の発展と衰退の時期は両地域で異なる。

第4章では、他動性と関連してle語法がみられやすい文脈を考察した。その結果、時代や地域を問わず、他動性が低い場合、le語法はみられやすいことがわかった。しかし、他動性の各項目が形態の選択に影響する程度は地域や時代によって異なる。他動性の高低を測る項目のうち、形態の選択に影響していると考えられる項目もあれば、あまり影響していないと考えられる項目もある。形態の選択に強く影響していると考えられる項目は、主語の有生性および目的語が受ける影響の強弱である。主語の有生性について、主語が有生性階層において高い位置を占める一人称または二人称である場合、語源を維持した形態が用いられる傾向にあり、反対に有生性階層において低い位置を占める無生物である場合、le語法がみられやすい。また、目的語への影響の強弱について、受ける影響が強い場合、le語法の割合が高い作品でもloが用いられ、反対に、受ける影響が弱い場合、leが用いられる傾向にある。また、直接目的語の指示対象に対する愛情や軽蔑など、与格または対格に典型的な意味から派生する要因によると考えられる形態の選択もみられる。

さらに、法とアスペクトについては、作品によっては一部の文脈でのみ形態の選択に影響していると考えられる。動性について、動詞がmatarである場合、一部の作品では指示対象が人の男性単数である場合に唯一loが用いられていることや本研究の資料体では複数形のle語法の例がみられないことから、動性の高い動詞ではloが用いられやすいと考えられる。しかし、他動性の観点からみれば、tenerが状態を表す動詞である場合、leが用いられやすいと考えられるが、le語法の割合が非常に高い作品でのみleの例がみられ、複数形のle語法がみられないことから、動性がない文脈ではle語法は用いられにくいと思われる。

反対に、形態の選択にあまり影響していないと考えられる項目は肯定性および直接目的語の特定性である。まず、肯定性について、否定文では一部の作品の特定の文脈においてはle語法が用いられる傾向にある。次に、目的語の特定性について、一部の作品では不特定の人物である場合、もっぱらleのみ用いられているが、他の多くの作品では目的語の特定性による形態の選択はなされていない。

ただし、項目間だけでなく、パラメータ間にも優劣が存在し、形態の選択においてより重視される項目のパラメータによって形態が決定されているため、形態の選択は非常に複雑になされていると考えられる。

また、第3章と第4章の考察結果から、形態の選択の歴史的変遷について、他動性による形態の選択が未発達であった13世紀の作品では、格の典型的な意味によって形態が選択されている可能性があると考えられる。しかし、14世紀以降の作品では他動性による形態の選択がなされるようになり、15世紀末の作品では、指示対象が有生物の単数である場合、性による形態の区別がなされるようになった。ただし、他動性が高い文脈では15世紀末以降の作品であっても語源を維持した形態が用いられている例もみられる。

第5章では、主語、直接目的語、間接目的語の3つの参与者からなる三項文における形態の選択を考察する。le語法圏および非le語法圏出身者の作品に共通していえることは、間接目的語が三人称である場合よりも、一人称または二人称である場合のほうがle語法の割合が高いことである。ただし、le語法圏出身者の作品のなかには、単数形では項数に関係なく、性による形態の区別が完全なかたちでなされているものもある。また、三項文でleを要求する動詞も、loを要求する動詞も二項文ではleを従えていることから、三項文では二項文よりもloが用いられる可能性が高いと考えられる。さらに、三項文においても他動性によると考えられる形態の選択もみられる。

第6章では、本論文の総括をおこない、今後の展望を示す。

本研究の特徴は、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)では取り扱っていない他動性の度合いを測る項目も考慮するとともに、他動性の各項目を細かく分類して分析をおこなうことで、他動性が直接目的語の形態の選択にどのように影響しているのかを詳細に考察していることである。また、leの使用を促す項目とloの使用を促す項目またはパラメータが併存する場合、どの項目またはパラメータが形態選択において優先されるのかを論じている。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 高橋 瑞奈美 )		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主査	教授
	副査	教授
	副査	教授
	副査	准教授
	副査	講師

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、スペイン語において本来三人称直接目的格の機能を果たす人称代名詞lo(s), 1a(s)の代わりに、同機能を果たす代名詞として同人称の間接目的格人称代名詞1e(s)を用いる1e語法(1eísmo)がみられやすい文脈を明らかにすることを目的としている。現在、同現象はスペイン語圏全域でみられるわけではなく、使用法や出現率は国や地域ごとに異なるとされている。また、1e語法使用者はもっぱら1e(s)のみを使用しているわけではなく、非1e語法使用者であっても文脈によっては1e(s)を使用することがあるとされている。

先行研究では、形態的および統語的要因、ラテン語の影響とスペイン語におけるその後の発展、通時的考察、他動性および語用論的評価、地域差など様々な立場から同現象の起源、変遷および実態を明らかにすることが試みられてきたが、十分に解明されているとはいえない。ただし、1e語法の出現率は歴史を通じて増加していくことは明らかにされている。1e語法はCantar de Mio Cidなどの古い文書においてすでにみられ、15世紀には人の男性単数の1e語法が一般化した。

本論文に先行する修士論文では、中世スペイン語では他動性の低い文脈において1e語法が出現しやすい可能性があることが確認されたが、本論文では他動性と関連して1e語法がみられやすい文脈を考察、また、より広範な時代から1e語法の出現傾向を通時に考察するために、13世紀から20世紀初頭までに書かれた26文学作品を資料体とするが、1e語法の出現傾向の通時の考察を適切におこなうために、作者の出生年を考慮しつつ選定されており、さらに、16世紀以降の作品については、1e語法がみられやすい文脈を知る手がかりとするために、通常1e語法がみられないとされている非1e語法圏出身者によって書かれた作品も取り扱われている。

本論文の考察手法は、まず、資料体からスペイン語の三人称の弱形代名詞(1e(s)、lo(s)、1a(s)、語尾消失形1'、1e(s)の異形1i(s))の例をすべて収集し、その指示対象を分析し、指示対象ごとの1e語法の出現率を算出する。次に、先行研究が提唱する他動性の度合いを測る項目をもとに本論文で使用する他動性の度合いを測る10項目(意図性、主語の有生性、直接目的語の特定性、直接目的語の受ける影響、動性、肯定性、法、アスペクト、話者の語用論的評価、項数)を構築し、それぞれの例において1e(s)および1i(s)が直接目的語として用いられている要因と語源を維持した形態lo(s)または1a(s)が用いられている要因を他動性の観点から見出す。このようにして、1e語法の拡大を促した要因を探り、1e語法の出現傾向および変遷を考察する。

第1章では、研究の背景、本論文の目的、考察手法、各章の構成を紹介している。

第2章では、スペイン語の三人称の弱形代名詞が非語源的に使用されるようになった要因に関する仮説を述べている先行研究を概観している。

第3章以降では、本研究の資料体である13世紀から20世紀初頭のあいだに書かれた26文学作品の例の考察をおこなわれている。

第3章では、非語源的用法の出現率の通時の考察をおこなうために、各作品について指示対象別に1e語法および1a語法の出現率を示す。考察の結果、時代および地域に関係なく、ほとんどすべての作品で指示対象が人の男性単数である場合、1e語法がもっともよくみられること、ただし、指示対象が有生物の男性単数である場合に次いで1e語法がもっともよくみられる指示対象は作品が書かれた時期や地域によって異なること、また、性による形態の区別は1e語法圏のほうがよくみられること、さらに、非語源的用法の発展と衰退の時期は両地域で異なることが確認された。

第4章では、他動性と関連して1e語法がみられやすい文脈を考察した結果、時代や地域を問わず、他動性が高い場合、1e語法はみられやすいことがあきらかになった。しかし、他動性の各項目が形態の選択に影響する程度は地域や時代によって異なり、形態の選択に影響していると考えられる項目もあれば、あまり影響していないと考えられる項目もある。形態の選択に強く影響していると考えられる項目は、主語の有生性および目的語が受ける影響の強弱で、主語が有生性階層において高い位置を占める一人称または二人称である場合、語源を維持した形態が用いられる傾向にあり、反対に有生性階層において低い位置を占める無生物である場合、1e語法がみられやすい。また、目的語への影響の強弱について、受ける影響が強い場合、1e語法の割合が高い作品でもloが用いられ、反対に、受ける影響が弱い場合、1eが用いられる傾向にある。また、直接目的語の指示対象に対する愛情や軽蔑など、与格または対格に典型的な意味から派生する要因によると考えられる形態の選択もみられる。

さらに、法とアスペクトについては、作品によっては一部の文脈でのみ形態の選択に影響していると考えられる。動性について、動詞がmatarである場合、一部の作品では指示対象が人の男性単数である場合に唯一1oが用いられていることや本研究の資料体では複数形の1e語法の例がみられないことから、動性の高い動詞では1oが用いられやすいと考えられる。しかし、他動性の観点からみれば、tenerが状態を表す動詞である場合、1eが用いられやすいと考えられるが、1e語法の割合が非常に高い作品でのみ1eの例がみられ、複数形の1e語法がみられないことから、動性がない文脈では1e語法は用いられにくいと思われる。

反対に、形態の選択にあまり影響していないと考えられる項目は肯定性および直接目的語の特定性である。まず、肯定性について、否定文では一部の作品の特定の文脈においては1e語法が用いられる傾向にある。次に、目的語の特定性について、一部の作品では不特定の人物である場合、もっぱら1eのみ用いられているが、他の多くの作品では目的語の特定性による形態の選択はなされていない。

ただし、項目間だけでなく、パラメータ間にも優劣が存在し、形態の選択においてより重視される項目のパラメータによって形態が決定されているため、形態の選択は非常に複雑になされていると考えられる。

また、第3章と第4章の考察結果から、形態の選択の歴史的変遷について、他動性による形態の選択が未発達であった13世紀の作品では、格の典型的な意味によって形態が選択されている可能性があると考えられる。しかし、14世紀以降の作品では他動性による形態の選択がなされるようになり、15世紀末の作品では、指示対象が有生物の単数である場合、性による形態の区別がなされるようになった。ただし、他動性が高い文脈では15世紀末以降の作品であっても語源を維持した形態が用いられている例もみられる。

第5章では、主語、直接目的語、間接目的語の3つの参与者からなる三項文における形態の選択を考察している。1e語法圏および非1e語法圏出身者の作品に共通していえることは、間接目的語が三人称である場合よりも、一人称または二人称である場合のほうが1e語法の割合が高いことである。ただし、1e語法圏出身者の作品のなかには、単数形では項数に関係なく、性による形態の区別が完全なかたちでなされているものもある。また、三項文で1eを要求する動詞も、1oを要求する動詞も二項文では1eを従えていることから、三項文では二項文よりも1oが用いられる可能性が高いと考えられる。さらに、三項文においても他動性によると考えられる形態の選択もみられる。

第6章では、本論文の総括をおこなっている。本論文の特徴は、先行研究では取り扱われていない他動性の度合いを測る項目も考慮するとともに、他動性の各項目を細かく分類して分析をおこなうことで、他動性が直接目的語の形態の選択にどのように影響しているのかを詳細に考察していることである。また、1eの使用を促す項目と1oの使用を促す項目またはパラメータが併存する場合、どの項目またはパラメータが形態選択において優先されるのかを論じている。

以上の内容について、審査委員会は以下のとおりの評価をした。

当該現象を記述、考察するために、中世から近代に至る多くの作品中に出現する形態を網羅的に採取し分析しており、それには膨大な作業量を要したと考えられるが、その作業をていねいにおこない、慎重に分析、考察をおこなっていることは評価でき、学位の授与に値することを審査員が一致して認めた。